

150131 小島塾レクチャー配布プリント

小島志塾東京例会

「日本人の外国語学習と国語の関係」

小川豊

日時 2015年2月9日(月) 15:00~17:00

場所 日本プレスセンタービル 9F大会議室(東京都千代田区内幸町)

プリント

小澤征聖出演(1963, 28歳)のクイズ番組のトランスクリプト

『福翁自伝』からの抜粋

英語教育を巡る小川の3つのエッセイ:

1/3 英語学習の四つの意味

2/3 日本型英語教育のための序章

3/3 五年生のCさんへ 電車の乗り方など - 「公」の意識のめばえ

小川豊の連絡先:

クエスト21 ランゲージ・インスティテュート

〒150-0035

東京都渋谷区鉢山町3番地18号 ルモンド代官山103

TEL / FAX 03-3477-1211

電子メール: quest21@pop12.odn.ne.jp

URL: <http://www2.odn.ne.jp/~cbh56070/>

ブログ: 外国語学習の意味、そして母国語について考えましょう

一回目: <http://blog.goo.ne.jp/quest21/e/4b0ca5ccb7209e042b0edca060196c61>

小澤征麿のクイズ番組出演 トランスクリプト

What's My Line? - Seiji Ozawa (1963, TV Show)

<https://www.youtube.com/watch?v=K8u6MoA7fv0>

06:47

小澤 What's my line 2Guest Woody Allen and regulars Bennett Cerf, Arlene Francis, and Dorothy Kilgallen appear on the panel. The program first aired on July 7, 1963.

John Charles Daly: And now to meet our first challenger. Will you enter and sign in please.

(laughter)

D: Seiji Ozawa. Is that right?

(applause)

D: Mr. Ozawa, where are you from?

O: From Tokyo.

D: From Tokyo. I might say that I have had good fortune to be out in your country several times, and I think it's a great nation and a great people. Enjoy to have you here with us, sir. May I present our panel, Mr. Ozawa. Now would you join me here please, sir. Do you know how we keep score on "What's my line?" ?

O: Yes.

D: All right, in that event we'll let the audience in the theater and the audience at home know exactly what your line is.

小澤 What's my line? 3<< SYMPHONY CONDUCTOR>>

(applause)

D: All right. Panel, we can tell you that Mr. Ozawa is self employed, and deals in a service, and we'll begin our general questioning with Arlene Francis.

Arlene Francis : Mr Ozawa. Is that the correct pronunciation?

O: Yes.

F : Mr. Ozawa. Is the service that you do, is it something that can be enjoyed by any of the members of the panel?

O: Yes.

F : Is it a service that has some entertaining aspects to it?

O: Yes.

F : Oh. Would you say, Mr. Ozawa, that you are a performer?

O: Yes.

F : Are you a performer in your country on television?

D: Sometimes.

O: Sometimes...

F : Do you ever perform in a quiz program?

O: No.

D: That's one down. Nine to go. Mr. Cerf.

Bennett Cerf: Mr. Ozawa. Do you ever perform outdoors?

O: Yes.

C: When you perform outdoors, would it ever be in some form of athletic endeavor?

O: No.

D: No. That's two down and eight to go. Miss. Kilgallen

Dorothy Kilgallen: Would you perform from indoors, too?

O: Yes.

K: Is there any music involved in what you do?

O: Yes.

K: Do you play a musical instrument?

O: No.

D: That's three down and seven to go. Mr. Allen.

Woody Allen What's my line? Woody Allen: Uh... Do you perform that thing you do
....uh... by yourself?

D: performance he alone in the

A: Yes. Is there a one man act that you do?

O: No.

D: That's four down and six to go. Miss Franklin.

F: Then, there are, Mr. Ozawa, other people associated with you when you are performing? Is that correct?

O: Yes.

F: Is music used when you are performing?

O: Yes.

F: Is there movement associated with what you do?

O: What?

D: Movement associated with what...I would think we could agree there was movement associated with that you do?

O: Yeah.

F: Is this, however, not the ballet?

O: No.

D: Yes, it is not the ballet. No.

F: It is not the ballet. Is there anything about what you do that,, requires a certain dexterity... or skill in the performance?

O: What?

D: Certain dexterity or skill in the performance? I would..., I would agree that these elements as you are pronouncing them are necessary in one degree or another.

F: Is there..... Do you use uh..... any accessories in your performance other than yourself?

O: Oh... I use... Yes, I would...Yes.

F: Um...Are the things that you use recognizable to American audiences?

O: Yes.

F: Yes? Are these things something you might hold in your hand?

O: My hand?

F: The the instrument or the accessories would it be something you hold in your hand?

(D: The things you are...??)

O: Yes.

F: Yes? Also are you ever off the ground?

(laughter)

O: what!? (Laughs)

D: Are you ever off the ground? (Laughs)

O: No.

D: I think we say no to that. Five out of five. Mr Cerf.

C: Mr. Ozawa. Would your...the act that you do...in the company that you perform, be more apt in a circus or a carnival, or a state fair?

O: Yes.

C: Is the music that is part of your act, is it essential to the act rather than just the background? Do you do some kind of dancing or singing then?

O and D: No.

D: Six down four to go. Miss. Kilgallen.

K: Mr. Ozawa. Do you ever turn your back to the audience?

O: What did she say?

小澤 What's my line? 4D: Do you ever turn your back to the audience?

O: No.

D: You know, to the audience.

O: Oh. Yes, yes.

(D: Yes.)

K: When you turn your back to the audience, are you facing people who are making music?

O: Yes.

K: Are you a conductor?

O: Yes!

D: I must say, just for fun we'll ?slip/skip? all the cards, and I know now I'm going to refresh your memories. Seiji Ozawa won the Koussevitzky Prize at Tanglewood in 1960. Was assistant conductor of the philharmonic under Bernstein in the 1961-62 season, I believe.

O: Yes.

小澤 What's my line? 5D: Is a conductor of international reputation now, and is going to conduct here in New York at Louison Stadium on Wednesday or Thursday is it, this week?

O: Tuesday and Wednesday.

D: Tuesday and Wednesday at Louison, this week. I suppose one of the memorable television programmes, one of the many memorable ones, with which the New York Philharmonic Orchestra was associated was the one that was done in Japan, and all of us that saw that will remember Mr. Ozawa and his work very well. Very nice to have had you with us, Mr. Ozawa.

I like cards I know refresh memories Seiji Ozawa, one of the Koussevitzky prize, Tanglewood in 1960. assistant conductor of the philharmonic of Bernstein, 1961 and 1962, I believe? conductor of international reputation. Now conduct her in New York stadium, on Thursday this week?

O: Tuesday and Wednesday

D: Tuesday and Wednesday in Stadium this week. I suppose one of the memorable television programs, one of the many memorable ones, which is New York Philharmonic Orchestra with.... associated with from Japan. All of us who saw that remember Mr. Ozawa. Well very nice to meet with us

福沢諭吉の外国語学習

福翁自伝より

① 自身自力の研究

さてその写本の物理書医書の会読を如何するかというに、講釈の為人(して)もなければ読んで聞かしてくれる人もない。内証で教えることも聞くことも書生間の恥辱として、万々もこれを犯す者はない。ただ自分一人でもってそれを読み砕かなければならぬ。読み砕くには、文典を土台にして辞書に便る外に道はない。

② 英学発心

ソコデもって、蘭学社会の相場は大抵わかってまず安心ではあったがさてまたここに、大不安なことが生じて来た。私が江戸に来たその翌年、すなわち安政六年、五国条約というものが発布になったので、横浜正しく開けたばかりのところ、ソコデ私は横浜に見物に行った。その時の横浜というものは、外国人がチラホラ来ているだけで、掘立小屋みたような家が諸方にチョイ／＼出来て、外国人が其処に住まって店を出している。其処へ行ってみたところが、一寸とも言葉が通じない。此方の言うこともわからなければ、彼方の言うことも勿論わからない。店の看板も読めなければ、ビンの貼紙もわからぬ。

③ 小石川に通う

横浜から帰って、私は足の疲れではない、実に落胆してしまった。これは／＼どうも仕方ない、今まで数年の間、死物狂いになってオランダの書を読むことを勉強した、その勉強したものが、今は何にもならない、商売人の看板を見ても読むことが出来ない、さりとては誠に詰らぬことをしたわいと、実に落胆してしまった。けれども決して落胆してられない場合でない。あすこに行われている言葉、書いてある文字は、英語か仏語に相違ない。ところで今、世界に英語の普通に行われているということはかねて知っている。何でもあれは英語に違いない、今我国は条約を結んで開けかかっている、さすればこの後は英語が必要になるに違いない、洋学者として英語を知らなければ通(とて)も何にも通ずることが出来ない、この後は英語を読むより外に仕方がないと、横浜から帰った翌日だ、一度は落胆したが同時にまた新たに志を發して、それから以来は一切万事英語と覚悟を極めて、さてその英語を学ぶということについて如何して宣いか取付端(とりつきは)がない。(-----)

④ 藩書調所に入門

(-----)

さて如何したら宜かろうかと考えた。ところで、だん／＼横浜に行く商人がある。何か英蘭対訳の字書はないかと頼んでおいたところが、ホルトロップという英蘭対訳発音付の辞書一部二冊物がある。誠に小さな字引だけれども価五両という。それから私は奥平の藩に歎願して買い取って貰って、サアもうこれで宜しい、この字引さえあればもう先生は要

らないと、自力研究の念を固くして、ただその字引と首っ引きで、毎日毎夜独り勉強。またあるいは英文の書を蘭語に翻訳してみて、英文に慣れることばかり心掛けていました。

④少女の写真

それからハワイで石炭を積み込んで出帆した。その時に、一寸したことだが奇談がある。私がかねて申す通り一体の性質が花柳に戯れるなどということには仮初めにも身に犯したことないのみならず、口でもそんな如何わしい話をしたこともない。ソレゆえ、同行の人は妙な男だというくらいには思っていたろう。それからハワイを出航したその日に船中の人に写真を出して見せた。これはどうだ(その写真はここにありとて、福沢先生が筆記者に示されたものを見るに、四十年前の福沢先生のかたわらに立ち居るは十五、六の少女なり。)——その写真というのはこの通りの写真だろう。ソコで、この少女が芸者か女郎か娘かは、勿論その時に見さかいのある訳けはない。——「お前たちはサンフランシスコに長く逗留していたが、婦人と親しく相並んで写真を撮るなぞということは出来なかつたろう、サアどうだ、朝夕口でばかり下らないことを言っているが、実行しなければ話にならないじゃないか」と、大いに冷かしてやった。これは写真屋の娘で、歳は十五とかいった。その写真屋には前にも行ったことがあるが、丁度雨の降る日だ、そのとき独りで行ったところが娘が居たから「お前さん一緒に取ろうではないか」と言うと、アメリカの娘だから何とも思いはしない。「取りましょう」と言うて一緒に取ったのである。この写真を見せたところが、船中の若い士官たちは大いに驚いたけれども、口惜しくしくも出来なかつた、と言うのは、サンフランシスコでこのことを言い出すと、直に真似をする者があるから、黙って隠して置いて、いよ／＼ハワイを離れてもうアメリカにもどこにも縁のないという時に見せてやって、一時の戯れに人を冷かしたことがある。

英語教育を巡る小川の3つのエッセイ：

1/3 英語学習の四つの意味

2/3 日本型英語教育のための序章

3/3 五年生のCさんへ 電車の乗り方など - 「公」の意識のめばえ

埼玉県の私塾組合の雑誌、『SKJ リポート(H24 春)』に掲載したコラム。

茅ヶ崎便り・海辺の茅屋より

英語学習の四つの意味

小川豊（英語学校経営）

小学校での英語教育が必修になって1年目が終わった。小学校で英語を教えるべきかどうかという議論も今では忘れられたかのようになったが、これまた、いつもの日本的な、なし崩しの結果なのだろうか。

■小学校での英語教育

英語教育導入反対の急先鋒は、数学者藤原正彦であった。賛成論者には多数の英語の専門家が関わっていてその名前は覚えられない。論点は単純で、必要だから英語を教えるべきだという立場と、小学校では学ぶべきものは国語であり、実用という理由で国語という、なによりも優先すべきものを犠牲にすべきではないという議論であった。つきつめれば、理想と実用という普遍的な対立である。古来、この対立は理想論に絶対的な真理があつて、そうでありながら、というか、そうであるので、勝つのは実用派に決まっている。

そういうことが分かって議論しているのであれば、いわゆる「出来レース」で、双方の感情的満足は得られるかもしれないが、その後の教育に実りある成果をもたらすことはない。日本的といったのは、その点である。

実際に導入されるのであれば、そこに理想の幾分でも配分できないかと考えるべきではないかと思うが、1年たった今どうであろう。悲観的観測もあるし、光明もある。

■英語学習の意味

なぜ、英語を学習するのだろうか。そこに実用以上の意味があるのかどうか。他のアジア諸国ではそんなことを考えることを許されないほど、英語の力は大きく、母国語の力は乏しい。日本ではそれを考える余裕があるというだけでも幸せだと思ふべきである。

英語を学習する理由を四つに分けて考えることができる。英語学習の哲学というものである。哲学というと実際的な価値がないと思われがちであるが、いや、そんなことはない。

その四つのどれを重んじるかによって、教育法も予算配分も違ってくる。四つに触れた後、さらに深く、英語を学習する理由について、ひとこと触れる。

四つというのは以下の通りである。

一：英語学習は、ほとんどの日本人にとって初めての外国語との接触。

二：英語という外国語を通して母国語を学ぶということ。

三：日本語と外国語の双方の底に通じている普遍的な言語を学ぶということ

四：地方言語としての英語を学ぶこと。

あまり当たり前のことであると、逆に理解しにくいことがある。しかし、例えば、このようなことをどう考えるか。英語を母国語にしている人の生活感に触れるような表現を覚えることと、法律や技術などの分野で、とりあえずアメリカ人でも日本人でも誤解なく通じさせるための用語を覚えること、この二つのどちらを優先しますか、と問われたら。たいていの人はいずれも大切だと思っているだろうが、こと英語教育という実際の場におけば、時間とお金は限られているのだから、選ぶ必要があるのである。もし基準がはっきりしなければ、ものごとは全て力関係で決まる。ニューヨークの日本人学校の父兄会の声が大きいか、技術翻訳者連盟の声が大きいか、である。

力関係は、時とともに移ろう。朝令暮改の弊をいとうのであれば、最初から優先順位をしっかりと考えるべきではないだろうか。「哲学」が、必ずしも現実離れしていない所以である。

■母国語でない言語の経験

一つ目の理由から検討しよう。外国語イコール英語のケースが大半であるために議論の対象になりにくいのが、大半の日本人にとっては外国語とは何かということのぼんやりした直感が欠けているのであるように思われる。それは、子どもの頃から近所に外国人がいるという体験が少ないからであろう。欧州であればたいていの子は、幼い頃から身近に外国語を話す人と接する機会がある。それがどういう意味を持つか。身近に全く理解できない言葉話す人たちがいる、ということと、それにも拘わらず、彼等が自分たちと同じような生活をしているという二重の経験である。一つ目だけであると、異質のものとして避けるべきものになってしまうだろう。古代ギリシャの都市市民からみた、バルバロイ（野蛮人）がそうなのかもしれない。バルバロイとは、意味が分らない言葉をバルバロ話しているという意味である。二つ目の経験は、子どもに自ずとこの言葉を話してみたい、分りたいと言う気持ちを引き起こす。こうした経験が子どもの頃からあるかないかは、たいへん大き

い違いに結びつく。日本人だと、りんご=appleだと習えばそれでおしまいである。発音も「あっぷる」で一生満足する。ましてや、an apple / apples / the apple / the applesの違いなど、そうとう英語を学んだ日本人にとってもどうでもいいものであり続ける。ここで、「ん？、ちょっと違うな、自分は分っていないのじゃないかな」という疑問を持つことこそ外国語の元来の学習である。それが英語であれ、中国語であれ、フランス語であれ、自己の言語に対する他者の経験、これが、最初の外国語としての英語学習の意味である。

■他国語を鏡として

二つめの意味での英語学習は、一つ目と連動する。他者としての英語を意識することは母国語に対しての意識も高めてくれる。我々が当然と思っている国語の表現が必ずしも当然でないという経験は、自分を相対化するという10代での人間的成長とパラレルな関係がある。10代での英語学習の隠れた意味と言える。聞くところによると、高校では英語の先生と国語の先生は仲が悪いらしい。国語の先生曰く、英語教育を通して生徒の日本語が破壊されると。なるほど、関係詞とみれば、「～のところの」と訳すのを耳にタコができるほど聞いていればそういうこともある。しかし、なぜそう訳さなければならないかを考えてみれば、日本語と英語の違いから、日本語の特質を理解するよい機会になる。英語も国語も言語の教育である。物理と化学のように近い関係にある科目である。しかし、概して英語の先生は、英語を教えている時も、半ば国語を教えているのだという意識が乏しいと思う。

■普遍的言語とは

三つ目も、もし一つ目と二つ目の勉強が進めば、一つの論理的帰結と言える。英語と日本語の違いを超えて、「じゃあ、通じるのは何なの」という問いかけが習う者の精神に生じるからである。それは、英語と日本語に共通する部分、いや、英語、日本語だけでなく、各国語に共通する「普遍語」と言える部分である。「英語に訳すと分りやすいね」などと言うとき、人の頭にあるのはだいたいこの「普遍語」のことである。文化的匂いをそぎ落とした、ある意味で、味わいのない言語ではあるが。

このことの重要性をもっと意識してもらいたいのは政治家である。政治家が日本語で演説した場合、それは即座に英語に翻訳される、いや、英語だけでなく中国語、フランス語、韓国語、ロシア語のニュースにも翻訳される。その際、自分のことを「私」と言おうと、「俺」と言おうと、「僕」と言おうとも、または「朕」と言おうと、その違いは全く通じない。欧米語の一人称単数という抽象的な機能だけが翻訳されるのである。翻訳され、その政治家の発言として世界に広まるのは、日本語でも英語でもなく、あるいは日本語でも英語でも、中国語でもフランス語でもない。それは、他のどのような言語にも翻訳される「抽象的」、かつ「論理的」要素だけである。たしかに、政治家が感情的効果を狙って翻訳不可能な言葉を使うこともあるだろう。しかし、それは通じないということ意識した上で使ってもらいたい。演説の効果を上げるために凝った表現を使った代わりに、論理の面で誤解され

やすい表現を使ってしまようなことはあって欲しくない。そういう意味で、たとえ英語が話せなくても政治家など責任を問われる立場の人は、「英語」を知っていなければならない。「翻訳機械が発達すれば外国語学習の必要が減る」という意見がかつてあったが、とんでもない、その逆である。これからの政治家は、というより、「市民」を自覚する人は、少なくとも公に発言する際は、英語に翻訳されたらどうなるだろうと意識して話す必要がある。もっとも、この意味での英語学習は、外国語としての味わいが楽しめない。それだけに、「伝えねば」という意志を強く持たないと、教えたり、学んだりすることはなかなかできないと思う。

■ 地方言語としての英語

四つ目の英語は、シェイクスピアと、街のやくざの英語。ずいぶんかけ離れた例だと思われるかもしれないが、どちらも、よっぽど英語に親しまなくては分らない点では共通している。詩の持つイメージの世界と、庶民の使う生命力に溢れた言葉はその言語にどっぷりつかって初めて分るものである。分ったという感じを持ったときにその言葉は、母国語でなくても、その人にとっての「祖国」に近いものになる。シオランが「国語は祖国である」と言ったときの「祖国」である。しかし、そこまで達するのは、その言語と共に生きることを決めた人だけである。外国人に「おれ」、「僕」、「朕」にまつわる感情的な意味を理解してもらうのはなかなか難しい。「ばたばた」、「どたばた」、「ごたごた」を適切に使分けってもらうのはもっと難しい。ましてや、詩と隠語のもつ豊かさはそれが日本語であれ、英語であれ、外国人がそれを理解するまでには遠い道を歩まなければならない。

■ 英語を通して普遍的な言語へ

さて、皆さんは、以上の四つの英語学習のうち、どれに焦点を当てるべきだと思うだろうか。小学生に英語を教える場合、母国語と違う言語が、同じ人間によって使われていることを体得させるべきであろう。国語の先生は、英語の勉強をとおして母国語についての理解を深めてもらいたい。しかし、時間とお金が限られた状態で、まず学んでおくべきなのは3つ目の意味での英語だと言えないだろうか。英語の「専門家」は、4つ目を目指しているかもしれないが、それを習う側に押し付けることはできない。教室で知識を見せびらかす時間があつたら、3つ目の英語力に必要な、論理的表現を先に教えるべきではないかと思う。大学の社会人講座で毎年私が試めしているのだが、検定試験などで高い点数をとっている人でも、十万以上の数字を英語と日本語の数字ですぐ変換できる人は少数である。a / the、つまり欧米語の基本である冠詞、これも、中学2年ぐらいの水準であっても、ほとんどの人が間違え続ける。数字表現など英語教育の本質ではないと思っている英語の先生が多いのかもしれないが、普遍的な意味の伝達ということを基準におけば、優先順位が変わってくるだろう。

■ 「英語を」から「英語で」へ

さて、ここで、もう少し深い問題に触れる。四つの英語学習の意味を考える前に、いったい、日本人は英語を学習する気があるのか、という問いである。日本人は英語で理解しよう、伝えようという気がないのではないか。そういう疑いが脳裏をかすめることがある。そう思う理由がある。今までの日本では、他のアジアの国のように、米国に亡命しなければ生きていけないわけではなかった。定年までは会社が外資系の会社に吸収されることはないだろうとたかをくくっていたのである。どうしてそういう人が英語の学習に真剣になれるだろうか。

数字と冠詞のことを例に挙げたが、なぜ、習得が不完全なのか。その理由は、両方とも試験問題にあまり出題されないからである。逆に試験に出されやすい決まった表現にはやけに詳しい大学生もいる。この点を見れば、英語は試験に通るために手段にすぎないのではないかと思われる。

さらに深刻な疑いがふと浮かんで消えていく。日本人は…、英語に限らず、言語によって正確に理解しよう、正確に伝えようという意志が乏しいのではないかということである。国語教育でも、自由感想文は取り上げられても情報伝達のための作文技術はあまり重んじられていない。この点はその疑いを強める（最近少し変わってきたということも聞きますが）。

英語の先生にも責任があるだろう。英語を教えることを職業とした時点で、英語が、言語ではなくて飯の種と化す、ということはないか。そうでも考えないと、例えば、小さい点ではあるが、「理由」という知的活動の基本を支える接続詞、つまり、**because** と **since** の使い分け について、私が受け持っている社会人クラスの出席者のほとんどが教わっていないということがありえるだろうか。みな大学を卒業しているのである。

これらをまとめてみれば、英語という一つの言語が日本では現実とはかけ離れた一つの虚構のようになっているということになる。では、他国による占領などの過酷な事態を経験するまで、日本的なし崩しが続くのか、それまで、一つの外国語である英語という存在をリアルに認識できないのか。

光明はある。意外なところから光は差すのである。昨年からは NHK で始まった小学生向けの英語講座などをみて、日本人の外国語への感覚も捨てたものではないと思うようになった。この番組では「英語を」教えようとはしていない。「英語で」何かを学ぶと言う姿勢が貫かれている。それは色や形の概念、数字や自然の理解である。学習を進めるに従って英語と日本語との差異と共通点を意識できるように仕組まれている。監修者は、「エンジョイ・イングリッシュ」という言い方に違和感を持つと述べている。英語を楽しむなんてあるはずがない、英語で何かを学ぶから面白いのだ、と。日本人と外国語の関係について考えてみようという方は、この番組を見つけてみてもらいたい。あえて番組名は書かない。インターネットで昨年の放送分をみな見ることができる。

2/3 茅ヶ崎便り・海辺の茅屋より

日本型英語教育のための序章

小川豊（英語学校経営、玉川大学継続学習センターTOEFL 担当）

昨年のコラム(註 1)、「英語教育の意味」で、私は「つきつめれば、理想と実用という普遍的な対立である。古来、この対立は理想論に絶対的な真理があつて、そうでありながら、というか、そうであるので、勝つのは実用派に決まっている。」と書いた。

実際、そのとおりの結果になって、小学校 5 年から全国で英語が導入されて 1 年になる。この 5 月には、政府と審議会は、英語を、成績のつく正式科目への転換、小学 3 年生からの英語導入などを検討している。高校では、数年前から、英語の時間は英語で教えることになっているようだ。大学受験では、米国大学における外国人向け英語試験、TOEFL の導入など、実用派の勢いはとどまらない。

これほどの変革を求めるのであれば、現在の英語教育に大きな、そして明白な問題があり、多少の意見の相違があつても、その方向は誰でもが認めるものであるはずである。しかし、その大問題が何であるか、それほど明白であろうか。

■社会的ムードと政治的動機

時々、明白だと言われた社会問題が、単に社会的ムードに流され、政治という、それこそ大きな、そして明白な力によって左右されるということがあるように思われる。環境関連でそういう問題が起こる傾向がある。スーパーのレジ袋を使わないことが環境によいという主張、太陽電池などいわゆる再生エネルギーを促進する動きなどがそうであろう。誰でもあれ環境問題について少しでも勉強した人なら、それらは必ずしも明白ではないということとは分かっていると思う。しかし、ときどき人間はおかしな方向へつつ走る。それを推進する力は、社会的ムードと政治という二つの「明白な力」である。地震予測に予算をかける大震法もそうかもしれない。つい最近法律の廃止が決定されたそうだが、地震の予測にエネルギーを傾けるのは無駄であると強く主張する学者は 20 年前からいた。大震法がこれまで主導的であったのは、予算という生命線を失いたくない学者の「政治的」動機が原因の一つになっていたようである。

■英語教育における社会的ムード

英語教育において「大きな」、そして「明白な」問題というのは何であろう。どうも、専門的、科学的な研究に基づくものではなく、「社会的風潮」と呼ぶべきものが大きく影響しているのではないかと疑っていたら、次のような記事を見つけた。

教育評論家の石井昌浩は、自民党の教育再生実行本部の部会提言（註 1）を「これからの英語教育のあるべき姿をていねいに論議した上で公表されたものとは到底思えないほどの粗っぽい作文だと思った。」（註 2）とした上で、「中、高、大と 10 年間学んでも話せるように

ならない英語教育を変えたいという多くの日本人の願いは理解できるが、英語教育の抜本的改革の動機とするのは次元が違うと思う。」と述べている。なるほど、「社会的風潮」が英語教育の議論にただよっていると思うのは私だけではないようだ。

■英語教育は無力であったか

少し注意深く問題を検討しよう。「中、高、大と、10年間学んでも話せるようにならない」というほど英語教育は「無力」なものであったのであろうか。このような言説を日々耳にしているとなんとなくそう信じてしまいそうであるが、大学受験などでそこそこに英語を学習した人であれば、そういう言説に疑いを持つのではないかと思う。英語教育は無能だったのではなく、英語は外国の文献を読むために行われたのであって、書く面でも話す面でも英語で何かを伝えるための教育ではなかったのである。無能だったのはなく、目指す目的が違うのである。

福沢諭吉が、オランダ語が国際的に通用しないことが分かって、英語学習を再開した時以来、大学を中心とする英語教育は、江戸までの支那文明に対する態度と同様、読むことに主眼が置かれた。その範囲では、そこそこに英語能力は身についたのである。

さらに問題を複雑にしているのは、「日本人の英語力」と十把一絡げにする議論である。なにもあらゆる人が同じように英語ができるようになる必要があるわけではあるまい。英語を学習する必要がない人は、現制度でも、どんな制度改革をしても、学習しないであろう。一生英語を使う必要がない人間にどうして英語学習の動機が生まれるだろう。

福沢諭吉は、外国の文明を吸収するためという明確な目的があった。現在の英語教育はその目的をブレイクダウンすることで成り立っているが、それが140年以上変わっていない。それに加え、エリートとは言わないまでも、外国の文献を読む必要がある比較的小数の人向けのためのカリキュラムを薄めて一般国民にも適用したため、旅行などで必要な基本的な表現を繰り返し訓練することなどは意図的にしなかったという面がある。

一方、英語文献がそこそこに読めるようになった（と思っている）人から見ると、「英会話派」は、学校での努力を怠って、時流に乗って自己正当化している人間のように見えるということもあって議論の歯車がかみ合わない、という事情もあると思う。

■対象の性質に沿った学習

また、自民党の報告を読んだ限り、外国語の学習が他の教科との違いを考えた上でのこととは思えない。外国語だけではなく、何かを習得、研究する場合、対象の性質に従わなくてはならない。物理には物理の、歴史には歴史の、また、テニスにはテニスの、料理には料理の教え方の特徴というものがある。単に時間を増やせばいいというものではない。例えば、数学と比べると分かりやすいが、外国語学習は最初のうちが大変であり、上級に向かえば苦でなくなるという性質がある。反対に数学は上級になれば、それに応じて難しい。だから、能率よく中学生に英語を教えたければ、毎年週6時間均等に充てるのではなく、1年次が9時間、2年次が6時間、3年では3時間という方がよいと思う。しかし、そうなっ

ていないのは、他の教科との関係からである。こんなところにも、英語教育の困難の原因がある。自民党の報告は、TOEFLを導入するということばかり目立つ報告だったが、こういう考え方を他の教科にあてはめると、もし数学の力を伸ばしたかったら数学検定を導入、テニスの力を上げたかったらテニス特訓をする、ということになってしまいそうだ。対象の性格を考えずに、「欠けているところがあったら単にそこに何かを埋める…、お金と時間で。または、強制、命令で（つまり試験の導入ということ）」という程度の発想でしかないという印象である。何も考えていないのだろう。石井さんに「粗っぽい作文だと思った」といわれる所以である。

■目的

しかし、もちろん私は英語教育の改善の必要がないと言っているわけではない。日本の英語教育には、大きな問題があると考えている。しかし、明白であるとは考えない。ひとつひとつ考え、対策を考えなければならないと思う。それも、国家レベル、学校レベル、現場レベルの対策を、レベル間の相違を混同しないように慎重に立てる必要があると思う。まず、目的が問題である。目的の議論を述べ、それを踏まえて、三点具体的な問題点を挙げる。その三点とは、①声と文字の優先順位、②英語を理解することと表現することとの関係、③日本語と英語の関係である。これらの議論を通して、なんとなく「文法対会話」とか「役に立たないから」という議論から一歩踏み出す手立てとしていただけたら幸いである。

まず、目的であるが、学校教育が制度化、いや、形式化された挙句に、一人一人が、英語を何のために学習するのか、つまり目的を考えなくなっているということを指摘できると思う。NHKの小学生向け英語講座を監修されている小泉さんが、”Let’s enjoy English”（英語を楽しもう）という表現に疑問を覚えると述べていたが、その指摘が問題に光を与えている。小泉さんの趣旨は「英語で何かをするのが楽しい」というのは分かるが、英語自体が楽しいということを強調することはできないということである。言語自体は目的にならないという指摘は、そのとおりであると思う。言語は、何ものかを理解して、また、伝わってなんぼ、である。背景には、英語学習が、大学入試に受かるためであったり、TOEICの点数を上げて給料があがることであったりして、そのうち、英語学習の目的を考えなくなって、「英語を楽しもう」というせりふにも疑問を感じない心性を生み出してしまったということではないか。

■「発信」

では、今の時代に必要な英語教育の目的とはどのようなものか。ここでは、福沢以来の英語教育の変化の過程や、生徒や教員英語能力レベルの問題は詳述しない。前述の提言と実際の教育現場のギャップの問題などは、前述の石井さんの記事や、小浜逸郎のブログ（註3）を読んでください。

ここでは、「発信」ということだけに絞る。近頃、猪瀬都知事や、安倍首相の、オリンピック誘致のための英語でのプレゼンテーションがあったが、その涙ぐましい姿はまことに印象的であった。NHKでも、TED（註4）に基づいたプレゼンテーションの番組が始まっている。少々前には、ディベートということが言われ、最近ではプレゼンブームの感もあるが、私は今回も少々浮ついたものを感じる。ディベートが宗教団体による揚げ足取りのイメージが広がることもあって下火になったのと同様、プレゼンテーションが、「よい考えを広げる」（TED のモットー）という元来の目的から離れ、技術を競うものになるおそれがありはしまいか。例えば、「スティーヴ・ジョブのように話したいという」動機が主流になってしまえば、たぶん日本人のプレゼン熱も次第に醒めてしまうだろう。発信というからには、「表現したいという強い熱意」が必要である。その熱意がない人には、発信のための英語教育と言ってもあまり意味があるように思えない。

ここで、問題が、英語教育の外側に広がることになる。自己の考えを他者に伝える、認めるさせるということは、英語教育の枠を超えて、言語活動全般、道徳の問題である。いや、日本の文化には、アメリカのように「俺も俺も」という自己表現は必要がないという人もいるだろうが、これからの日本ではまったく違う文化に属する人を説得する必要は増すだろう。それ以上に、人は、誰しも人に認められることで初めて格形成できることを考えると、自己の考えを伝えることの重要性和難しさの両面を教育課程に組み込む必要があると思う。そのことを考えることなしに、英語教育の改革はできないだろう。

その意味で、国語教育と英語教育の関連をより深く考える必要がある。ところが、前記の自由民主党の報告には国語教育との関連の指摘は見られないし、実際、英語の先生と国語の先生が協力して、表現について、言語の使い方について教えているというケースは寡聞にして聞いたことはない。一言で発信というが、相手が分かってくれて、できれば相手が同意してくれて、初めて発信という行為がなりたつ。そのためには、相手の考えていることを正確に理解する訓練も必要になる。つまり、読解力の訓練も必要になる。読解力は国語の領域ということになっているが、英語、国語を横断する同じ能力である。この点を見ても、英語教育と国語教育が手を携える必要がある。

■ 声と文字の優先順位

英語教育の目的の議論はこれだけにして、具体的な英語教育の問題点を三点挙げる。まず、英語の音声面を先にするか、文字言語を優先するかという問題である。会話対文法ではなく、音声対文字。結論は、音声を先にすべきである。これは実際の教育課程で会話やリスニングにかかる時間を多くするという意味ではない。文字言語は音声言語を便宜的に書き写したものだという意識を、先生が持ち、生徒に持たせるべきだということである。例えば、know / tough / climb などの単語レベルでも分かるとおりに、英語の書き言葉はきわめて恣意的である。だから、音声言語から文字言語に移ることはできるが、文字言語から音声言語へ移ることは原理的に不可能なのだ。教育現場ではちゃんとやっているのではないかと

いうかもしれないが、それは、日本語の音声を媒介して、英語の文字 → 日本語の音韻 → 英語の音韻というややこしい過程を踏んでいるのに気がついていないだけのことである。「リスニングが難しい」というのは、現状の日本の英語教育では当然のことなのである。

■ 理解することと表現すること

英語学習の目的と根は同じ問題であるが、もっと具体的な側面である。高校を出るまでに英作文の授業があっただろうか。ほとんどの日本人の場合は皆無であると言える。ましてや、口頭による発表などあるはずがない(TOEFL ではとても重んじられている分野)。「いえ、文法の時間に少しやりましたよ」、という答えも返ってくるかもしれないが、それは、例えば、**not only A but also B** という構文を覚える手段に過ぎない。英作文であろうと、和文英訳であろうと、英語による伝達を学ぶことは、ある目的のために英語を書く(話す)ことなのだから、英作文の授業があるとしたら、まず言うべき内容があつて、それを、正確かつ効果的に表わすという二段階の過程が課題になるはずである。そのような訓練はめったにされていない。国語の時間でも、このような訓練はあまり行われていないのではないだろうか(註5)。

■ 日本語と英語の関係

日本人が英語を学習するということは、フランス人やドイツ人が英語を学ぶのとはかなり意味が違う。「英語を学ぶ」というが、実際は、「日本語から英語に移る」という作業である。ところが、日本語と英語は、構造、音声、語彙などとても違っている(語彙はだいぶ英語のが日本語に入ってきているが)。米務省では、日本語は英語から最も離れた言語の一つであるとみなしているそうである。だから、日本人が英語を習得するのは困難なのは当然なのだ。その点を無視して、ヨーロッパあたりの英語教育と比べ、日本の英語教育を批判しても、あまり意味がないのではないか。加えて、いまだ本当の意味での、「日本人のための英文法」と呼べる本や他の媒体、つまり、日本語から英語に移る橋渡しとなる、体系的なものはない(註6)。そういうものがあったら国語学者と英語の専門家の共著となるはずである。

「社会的風潮」となった英語論議より、英語教育に関する具体的な問題を、「明白」とは言わないまでも、多少ともは明るみに出すことができたであろうか…。もちろん、ここには、英語を学習する必要を感じていない人への英語教育とか、実際の現場での生徒のレベルの問題には触れていない。あくまで原理の話である。しかし、原理と言っても机上の空論ではない。カリキュラムを組む場合などにすぐ影響してくる。そこで一案。英語が日本語から離れた言語であるといことを逆手にとり、国語の先生と協力した上で、他国では行われていない日本式の英語教育、つまり、国語力の向上と英語力の向上が相乗作用で達成できる教育法を考えると、ときが来ているのではないかと思う。

註 1 : SSK リポート 128 号 「英語学習の四つの意味」

註 2 : <http://www.kantei.go.jp/jp/singi/kyouikusaisei/dai6/siryou5.pdf> 自由民主党 教育再生実行本部 『成長戦略に資するグローバル人材育成部会提言』

註 3 : 産経新聞 平成 25 年 6 月 1 日 (土) オピニオン 『解答乱麻 グローバル化、正しく受け止めよ』 石井昌浩

註 4 : TED (Technology Entertainment Design)。世界中で活躍している人たちが自分の考えを広めるためのプレゼンテーションをするのを助ける、ニューヨークの NPO。インターネットで動画とトランスクリプトが無料で見られる。

註 5 : <http://kohamait suo.iza.ne.jp/blog/entry/3087308/> ブログ「小浜逸郎・言葉の戦い」『こんな無意味・有害なことやめろ (その 3) 公立高校での英語による英語授業』

註 6 : 『レポートの組み立て方』、『理科系の作文技術』(木下是雄)などに国語教育の批判がある。

註 7 : 体系的な本ではないが、示唆に富む本はいくつかある。『日本人の英語』(マーク・ピーターセン)、『日本人の英文法』(ミントン) など。

3/3 埼玉県の私塾協同組合の機関誌「SSK」2013 第 3 号。

茅ヶ崎便り- 海辺の茅屋より

五年生の C さんへ 電車の乗り方など - 「公」の意識のめばえ

註 1：文中の括弧は、SSK 掲載時はルビ

註 2：C さんは、SSK 掲載時は実際の生徒の頭文字を使いましたが、ここでは、以前の記事にあわせ、ABC の 3 番目の C という意味です。

C さんへ

ヨセミテ公園はいかがでしたか。山火事が起きて大変だと聞いています。レストランで、自分で注文してみましたか。レストラン会話のレッスンはあまり時間がなかったので心もとないですが。

3 年の 3 学期から 1 年半ほど、私たちの英語学校の、唯(ただ)一人の小学生の生徒として、C さんはとても多くのことを学びました。question tag、日本語の「ですね、だよね」は、とても難しかったと思います。まだまだマスターをしたとは言えません。引き続き練習を重ねましょう。

私たちのスクールでは、英語のレッスンとはいえ、英語でお菓子作り、理科や算数の勉強も英語で行いました。母の日のサプライズ、ガトー・オ・ショコラには、お母様はつい涙ぐんでしまった、とおっしゃっていましたよ。お菓子作りの時は、学校の給食着に着替えて、まことに凛々(りり)しい姿でした。お母様に言わせれば、「レトロな姿」ということですが。そろそろ C さんに、なぜお菓子作りをレッスンに取り入れたのか説明する頃だと思います。最近、私は「C さんはもうおねえさんですから…」ということを何気なく口にしていたのを覚えていますか。それは伏線(ふくせん)だったのです。

■ 「片付けること」の意味

じつは、お菓子作りをしながらの英語レッスンは 4 つの段階に分けて考えています。クッキーをいただきながらの英語のレッスンは楽しいものです。それが第 1 の段階だとすると、作りながらの英語学習は第 2 段階。もっと本格的です。命令がたくさん出ました、“**Bake it for about sixty minutes at three hundred fifty degrees Fahrenheit.**” 「Celsius だと、何度？、倍量にしましょう…」。私の意地悪な指示にもめげず、立派なパウンドケーキが焼きあがりました。3 段階めは、命令に従うだけでなく、レシピ作りでした。原価計算まで試みました。しかし、一番大切だと私が考えるのは、第 4 段階の片付けです。作る過程では、出来上がったお菓子の味や食べる人を思い浮かべてがんばることができますが、片付ける時、どのような目的を思い浮かべればよいのでしょうか。イメージが湧きません。ですから、誰でも片付けが嫌いなのは納得のいくことです。しかし、片付けないとどうなるで

しょう。あとの人が台所を使うことができません。私たちがケーキ作りができるのも、誰かが片付けておいてくれたからです。こんなことを言うと、前の生徒さん、Cさんだったら「先生じゃん」と言いそうです（Cさんはとてつもない、愛すべき腕白でした）。それはたまたま私だということにすぎません。ほかの誰が使うか分からなくても、キッチンを綺麗（きれい）しておいてはじめてケーキ作りが「完成」するのです。確かに、オーブン（アブンの方が英語の発音に近いです）を開けた時のときめきから冷静な片付けに移るのには、ちょっとした心の切り替えが必要ですが、5年生のCさんにはもうできるでしょう。

■「公」とは

さて、4段階目の片付けが一番大切だと述べましたが、とりわけ、それは大人への入り口になるから大切なのです。人間の社会は、誰だか分からないがみんなのために、という気持ちで各自が行動することで成り立ちます。これを「公（おおやけ）」、または、「おおやけ」、と言います。英語では **public**、パブリックです。しかし、目に見えない何かのため、というのは分かりにくいものです。このあいだ、空気という目に見えないものの存在証明で頭を使いましたね。ですから、大人でも、この「公」の原則をつい破ってしまいがちなのです。

「公」の意味をもう少し掘り下げましょう。いま、目に見えないみんなのためと言いましたが、裏返すと、「誰からも見られている」ということを意味します。総理大臣という公の代表のような立場にいる人が、誰も見ていないからといって、タバコの吸殻をぼいと捨てたらどうでしょう。誰も見ていなくても、みんなのために決まっている規則は誰からも見られているのと同じように守らなければなりません。それが公職（こうしょく）にある人の職務です。総理大臣ともなると24時間、一言一言の発言にも気をつけなければなりません。くだけたインタビューで「チョコは森永にかぎるね」などと軽い気持ちで言ったら、すぐ明治から「うちのはだめですか」と言って来るでしょう。お調子者ねらいの投資家が、これを機会に森永の株の値段を吊り上げるかもしれません。そうしたら、明治の株が下がって損害が出ることもありえます。総理大臣ほどではないとしても、社会生活をする場合、公の時間と空間、つまり、誰からも見られている状態は、普通の人の生活のなかでも大きな部分になっています。

でも、それでは疲れてしまうのではないですか、という疑問が生じます。もちろんです。ですから、緊張をほぐすために、プライバシー（privacy：私）というものが存在するのは。しかし、総理大臣ともあろう者はプライベートな場で一息ついてほっとしたら、再び背広を着用、議場（ぎじょう）に臨（のぞ）むのです。プライバシーというものは、あくまで「一息入れる」ということです。古代ギリシャ人は、誰にも見られている広場で、国のために仕事をするこそ生きがいだと考えていたようです。ギリシャにおいてはプライバシーという考えはなかったと言われます。その後も、プライバシーというのは「奪われている」という意味に過ぎませんでした。

■電車で「公」を学ぶ

ところで、5年生ともなると、電車に乗る機会も増えることでしょう。電車に乗る経験は、公の意味を理解するためのとてもよい機会になると思います。電車の空間はみんなが譲り合い、誰からも見られている空間です。ときどき、電車のなかでお食事をしたり、お化粧をしたりしている人がいますが、こういうのを公私混同といいます。Cさんがお友達と電車に乗ったら、おうちや近所で遊ぶ時のように大声でおしゃべりをするのを慎（つつし）まなければなりません。公の空間である電車のなかでは、何に対しても準備する心持が大切です。例えば、足の弱っているお年寄りがいたらすぐ席を譲る心持です。ここで気をつけなければならないのは、かわいそうだから譲るのではないということです。かわいそうという優しい気持ちを持つことは、それはそれで尊いものですが、電車のなかでは、公の空間を私が守るのだという、晴れやかで、張り詰めた気持ちをいつも持ち、さっと席を立つことこそが大切なのです。人間の感情は移ろいやすいものです。優しい気持ちを見知らぬ人に対して持てないこともあります。そういう時、周りの目が厳しいなという圧迫感に負けて譲るのでは何かしらこわばった態度が表にでてしまいます。席を譲った後さっと遠くに移動してしまうと、ちょっと気まずい空気が流れます。席を譲ったら、相手の方々にこやかに挨拶し、ちょっとお話しするくらいの余裕を持ちたいものです。私の知り合いの年配の方は、ニューヨークの地下鉄で、乗車したら間髪（かんぱつ）入れずに座っていた黒人の大男から席を譲られ、そのことでアメリカという国を見直したと言っていました。私が言っていることは、学校の先生のおっしゃることと少し違うかもしれませんが。かわいそうだから席を譲るというのは、道徳です。そういう意味では、公を考えて行動することは必ずしも道徳とは言えないかもしれません。また、「Cさんが年をとった時、席を譲ってもらいたいでしょう、だから席を譲りなさい」というわけでもありません。これは「情け（なさけ）は人の為（ため）ならず」という論理ですね。それらのどちらでもなく、明るく、いつも誰に見られていても恥ずかしくないという誇りを持って振舞うことが、公ということなのです。

■個人と公の立場

世の中が公という考えで成り立っているという例を一つ挙げましょう。Cさんが会社の社長に選ばれたとします。その会社はCさんが社長になる前に事故を起こして周囲の住民に被害を与えました。裁判で会社側の責任が確定した後、Cさんは被害者の家を一軒ずつ訪ね、頭を下げなければなりません。過（あやま）ちを犯したら正直に謝りなさいということは、学校でもご両親からも厳しく教わっていると思いますが、実社会では、このように自分の罪でなくても謝る必要があるのです。その時も、社長になった代償として仕方なく頭を下げているのだという気持ちだと、表情や言葉尻にそれが現れてしまい、その挙句、相手が怒ってしまうこともあるでしょう。持参した菓子折りを投げつけられることもあるかもしれません。

しかし、社長としてのCさんは、個人ではなく、会社という団体の代表者なのです。近代

社会は、辞めたり、死んだりして責任の取りようがなくなる可能性のある個々の人間でなく、団体に責任を持たせることで成り立っています（法人 = corporation といいます）。そういう制度は約束ごとに過ぎないものですから、目に見えないものといってよいでしょう。お菓子作りの後片付けと同じです。その代表である C さんは、総理大臣のように公的な存在なのです。法人という制度を守るという意気込みで、明るく、誇り高く公の存在として振舞わなければなりません。

たしかに、同じ人間が個人と公の役割を 2 つ持つというのは、不自然なことです。それにも拘わらず、社会が発展してくるとますます公の場面は増えざると得ません。そのため、私と公とのバランスを取ることもますます大切になってくるでしょう。最近、コンビニでアルバイトをしている人が、冷蔵庫に入っている姿や、お店のピザを顔に貼り付けているのを携帯で発信して、大問題になりました。お店をたたまなくてはならないようになって損害賠償を請求されるかもしれないとのこと。どうしてそんなことをしてしまったのでしょうか。フェイスブックやツイッターなどは、誰にも見られている公の空間だということを知らなかったからです。それ以前にお店いうものは公の空間なのです。携帯やインターネットは恐ろしく便利なものです。しかし、それらの恩恵に浴する代償として、昔は王様や貴族だけが守ればよかった公の場での振舞い方が普通の人にも要求されるようになっていきます。しかも、議場で多くの人目の目に身を曝（さらすわけでもないのに、一見私的な道具のように見える携帯などが公の空間につながっていることは分かりにくいのです。しかし未成年だからといって許されません。総理大臣がチョコの好みを失言するのと同じような気軽さで、携帯で人の悪口を言ったのが大きな暴力となって響くのが、現代における公の空間というものなのです。

■デパート地下で

私たちの時代が古代ギリシャに戻っているのもしれません。でも、一人で社長と個人という二人の人間を使い分けるなんてやっぱり不自然じゃない、という声はまたしても聞こえてきそうです。たしかに。現代社会では、昔なら王様や大統領、貴族など一部の人にしか要求されなかったことが、普通の人にも課せられるのですから、窮屈です。でもこれは、高度に発展した社会と文明が滞（とどこお）りなく運営されるためにある程度仕方のないことなのです。そこで、息抜きするためのプライベートの必要も生まれてくるのですが、公の空間でもちょっとした気遣（きづか）いをすることでずいぶんリラックスできるものです。C さんは、東横デパートの地下、フードショウでお菓子作りの実演しているパティシエ（ル）さんと仲良くなったと言っていましたね。電車だけでなく、これから買い物も一人である機会が増え、店員さんとお話する機会も増えるでしょう。警察官や駅員さんだけでなく、デパートの店員の方たちも公の場で仕事をしているのです。お客さんに買ってもらいたいわけですから、そういう店員さんの「公」の部分では、とてもへりくだります。たとえお客さんが子供でもありがとうございますと頭を下げることでしょう。でも、そうされたからって客である自分が偉くなったと思っははいけません。店員さんはお店の代表

としてお客さんという公の存在、みんなにそのように言っているわけです。そこには、朝から狭い職場でがまんして笑顔をしなければならない、もう一つの店員さんの顔が隠れています。ですから、口には出さなくても、お客さんである C さんは、朝からお忙しいのに笑顔の対応ありがとうございますという気持ちを伝えてほしいと思います。その気持ちは必ず店員さんに通じます。今度来店した時、きっと覚えていてくれると思います。パティシエさんにも「お菓子の作り方を教えてくれてありがとうございます」と言ってみたらどうでしょう。その時、パティシエさんの見せる笑顔は個人の笑顔です。

さて、電車の乗り方を切り口に、「目に見えないみんなに対し、かつ、だれにも見られているように振舞うこと」つまり、公ということと、その問題点に触れてまいりました。最後に、電車に乗ったとき注意すべき点についてもう一つ述べておきましょう。子供である N さんは基本的に立っていなければなりません、すいていて座る場合、隣の人に、失礼しますと言う、あるいは、一礼することを心がけてください。実はほとんどの大人はそうしません。私は皆さんがそれをすれば東京の社会もぎすぎすしたものでなくなると思うのですが。

あ、そうそう、それから、目的の駅に着いた時、立ったら必ず席を振り返ってください。あわてていると忘れ物をする可能性が高いです。ドアが閉まってしまうと取り返しがつかなくなります。これだけは長年電車に乗り続けてきて、苦い思い出とともに年長者として私が C さんに間違いなく忠告できることです。

註：大人の読者の方へ：電車にはいろいろな危険が潜んでいます。しかし、子供に気をつけろとだけ言って猜疑心を育てる代わりに、電車のなかでの経験を通して、前向きな態度を育てたいものです。

■■